2114　離島覚書（愛媛県・竹ケ島）

令和３年 10 月 20 日

田島渡船

竹ケ島は北灘湾の湾口から南東方向に約４km沖の宇和海に浮かぶ。面積は 0.51 km ^{2}、周囲が 3.6 kmの小さな島で、高島（無人島）という島と砂洲で繋がっている。

竹ケ島へは定期航路がない。したがって竹ケ島に渡るためには、渡船をチャーターしなければならない。幸い、竹ケ島やその沖にある御王神島（おいつかみじま）（かつては人が住んでいたが今は無人島）は磯釣りに訪れる釣り人が多いことから、北灘湾に面する各地には渡船業者も多く、ネットで確認した限りでも 10 業者に及んだ。このうち２業者は釣り客を専用としていて、私のような島を訪ねる１人客は受け入れていないとして断られた。３件目に電話した田島渡船が連れて行ってくれることになった。ただし、釣客の送迎の関係からか出発時間を 15 時にして欲しいという。また料金は２万円とのこと。

宇和島の市街地に近い九島の調査を終えてからレンタカーで国道 56 号を南下し、宇和島市役所の津島支所の先を右折、北灘湾に沿って西に向かう。宇和島市津島町北灘乙という場所に田島渡船があり、道路脇に大きな看板が出ていたのですぐにわかった。初めての土地で、道に迷って約束の時間に遅れると大変なことになるため、少し余裕をもって来たので 30 分以上前に到着した。乗り場が確認できたので、少し周辺を視察する。

付近で待機していると、しばらくして船長が戻ってきた。ガンガゼを籠一杯持っている。ガンガゼはイシダイ釣りのいい餌なので、釣り客に販売するのだろう。

予定よりも早く 14 時 48 分に船着場を出発した。湾内には魚類養殖の生簀が所狭しと並ぶ。生簀には自動給餌機が装備されていることからＥＰを与えているようで、おそらくマダイが飼われているのだろう。また、湾の南側には真珠養殖の延縄施設が並ぶ。

湾内は養殖施設が多いことから船はスローで走った。湾の外に出るとスピードを増した

が、同時に北西からの風が強まった。昨日、比岐島に行った時にチャーター船の船長が明日は冬型の気圧配置になり風が強くなるといわれたが予想通りになった。波しぶきがこの風で飛ばされ、右舷には近寄れない。竹ケ島に近づくと高島が風避けとなって北西風は遮られ、静かになった。

15 時 10 分ごろ、竹ケ島に到着した。所要時間は 20 分強だった。

田島渡船の瀬渡し船（左の船に乗船）（左）、北灘湾内のマダイ養殖の生簀（右）

島民は 15 人

田島渡船の船は島の人に遠慮してか、漁港の外れの護岸に船の舳先が着けられた。舳先から飛び降りて竹ケ島に上陸する。渡船は私が戻るまで、そのまま湾内で待機することになった。

周辺には真珠養殖のボンデンブイや真珠ネットが雑然と放置され、雑草に埋まりかけていて荒涼とした雰囲気に寂しさを感ずる。

目の前には石を３ｍほど積み上げた塀があり、その背後に家が建つ。地形的に北西風は避けられているので、おそらく台風時の風や波浪から守るためだろう。

埋立地の先は漁港になっていて、漁船４隻が浮桟橋に係留されていた。その奥の内港には船外機８隻と真珠養殖用と思われる平らな船が係留されている。さらにそこから直角に曲がった山際の護岸沿いに鉄筋コンクリートづくりの２階建ての長屋が並ぶ。建物の前にはクレーンが整備されており、近代的な建物は寂れた島には不釣り合いに映る。この建物は真珠養殖が盛んであった時代につくられた真珠の作業小屋で、全部で 16 経営体分が連なっている。もちろん水産庁の補助事業で作られたものだろう。

2015 年国勢調査時の竹島の人口は 23 人、世帯数は 10 戸であった。後述する島の古老・梅田さん（84 歳）によると、現在島に住んでいるのは７世帯 15 人とのことで、常時島にいるのは 10 人ほどだという。そのほとんどは高齢者で、一部の人は本土側に住む子供のところに行ったり来たりしているらしい。島で真珠養殖をしている人は本土側に住み、島に通いながら仕事をしているという。

竹ケ島は 1700（元禄 13）年に開拓が始まったと伝えられ、1918（大正７）年に島民が庄屋から土地を買い取るまで、宇和島の大庄屋赤松家の所有地であった。

竹ケ島の世帯数は明治中期には 26 戸に増えてから、大正年間 28 戸、1953（昭和 28）年 25 戸、1973（昭和 48）年 26 戸（全て教員世帯を除く）と安定して推移していた。1960（昭

和 35）年以降の高度成長期に多くの島で人口流出が起こったが、竹ケ島は例外的にほとんど変化が見られなかった点に特徴がある。

これは 1963(昭和 38)年に後述する真珠及び真珠母貝養殖が島に導入されたためだった。1996（平成８）年の時点でも世帯数は 31 戸、人口は 99 人であったから、竹ケ島における人口の急激な減少は 21 世紀に入ってからのことだったのである。減少した原因は、1996（平成８）年ごろから発生したアコヤガイの大量斃死によって島の経済を支えてきた真珠及び真珠母貝養殖が壊滅的な打撃を受けたことにある。

30 戸以上あった世帯が、７戸に減っているから、島の家の多くは空き家になっている。ただ、通勤で真珠養殖を営む人と時々島を訪れる人が多いと見えて、荒れた家は少ない。

ススキの原にボンデンブイが放置されている（左）、高い石垣の家（右）

イワシ網

ここで竹ケ島の歴史を振り返っておこう。竹ケ島は 1955（昭和 30）年まで北宇和郡下灘村だったが５町村が合併して津島町になり、2005（平成 17）年に宇和島市になった。

津島町誌によれば、竹ケ島に人が住むようになったのは、宇和島藩の大きな収入源であったイワシ網を営むためだった。宇和島藩庁伊達家史料（三）「弐墅截　下」には 1682（天和２）年に竹ケ島に新たな漁場ができて結（ゆい）出網（共同漁業組織）１帖が新造され、８軒の家が共同で運営するようになったことが記されているという。

結出網の経営に関わる経費、つまり漁港、網、魚の干場、網船、手船などの総費用と藩に納める銀約 15 貫（入漁料に相当）はすべて庄屋（上述した赤松家）が負担した。したがって結出網で働く人々は雇われだったといえよう。ちなみに年間 300 俵（約 18 トン）の干鰯が獲れれば、黒字になったようだ。

上述したように竹ケ島への移住は 1700（元禄 13）年から始まったとされているので、竹ケ島にイワシ網の漁場ができた時期の８年ほど後になる。おそらく当初は日振島か本土側の北灘あたりから漁場に通って操業していたか、季節的に小屋掛けして操業していたのだろう。そのうち定住した方がいいということになり、1700 年から島に住むようになったものと考えられる。

竹ケ島への移住者は日振島と淡路島の２つの説があるようだが、両方とも納得できる。竹ケ島には「清家」という姓が多い。日振島も清家が多いので、日振島からの移住説は説得力がある。一方、宇和海でイワシを獲る漁法は淡路島の福良地方から伝わったといわれており、

漁法を伝えるために淡路島から宇和海にやってきた人がそのまま島に住み着いたケースもあるのかもしれない。

イワシ網漁業のために島に移住した人々は、当然ながら食料の確保を迫られる。当時、武士以外は自給自足が原則だったから山を開墾して段畑を造成、麦などを栽培した。つまり半農半漁の営みが始まったのであった。

以来、半農半漁の暮らしが、江戸時代から明治、大正、昭和と続いた。島の段畑は山の上まで続き、全部で約 10 町歩（10ha）あったという。多い人で７反、少ない人で１反から１反半を耕作していた。農地が少ない人は漁業をメインにしていたようだ。農業は基本的に女性が担い、冬に女性が岩ノリを採ることもあったが漁業は男の仕事だった。イワシが獲れなくなってからは一本釣りや刺網を営んだようだ。

真珠養殖の導入

半農半漁の島に大きな変化をもたらしたのが真珠養殖である。

旧津島町で最初に真珠養殖に成功したのは柿の浦の実藤盛男であった。1950（昭和 25）年のことだった。しかし技術的に未熟であったため、優秀な挿核技術を先進地の三重県から導入する見返りとして下灘の嵐湾（下灘漁協のあるところ）への入植を認めることにする。また県外からの真珠養殖業者の入漁は地元の雇用増大と真珠産業の振興によって漁村を豊かにするという思惑があった。宇和海のイワシ漁業は 1955（昭和 30）年をピークに急激に不漁になっていたし、日本の経済発展によって貨幣経済化が急速に進み現金が欲しい時代に入っていた。一方、三重県の養殖漁場は過密養殖が災いし漁場環境が悪化していたから新たな漁場の確保が求められていた。両者の利害は一致したのである。

津島町では、1956（昭和 31）年に伊予真珠（北灘湾）と村田真珠（嵐湾）が進出した。宇和海全体では、県外から 18 業者が進出している。

こうしたなか、竹ケ島でも真珠養殖の機運が高まっていく。しかし技術がなかったので三重県から養殖業者を受け入れることにしたのだが、下灘漁協は当初反対したようだ。島民はよその地区で県外業者を入れているのに竹ケ島に入れさせないのはおかしいのではないかと主張し、結局、三重県からの移住者を受け入れて 1962（昭和 37）年に島で真珠養殖が始まった。三重県からの移住者は宮本章さんといい、竹ケ島における真珠養殖の先駆者となった。彼の息子も島で跡を継いだが、３代目の孫は中学生まで島にいてその後島を離れた。

竹ケ島では島民 15 戸と宮本さんを含む 16 戸が株主になり、真珠養殖の共同事業体を組織する。また、挿核が不慣れだったため三重県からその道のベテラン３人（女性）が島にやってきて、宮本さん夫婦を合わせて５人が 15 戸分の玉入れをしてくれたそうだ。

愛媛県は 1957（昭和 32）年に、県外から進出した真珠業者と地元漁民の生産調整を図るため、「愛媛方式」と呼ばれる真珠養殖事業指導指針を策定する。その内容は、①真珠養殖と母貝養殖の経営分離、②母貝養殖の漁協管理、③区画漁業権免許は漁協と真珠養殖業者の共願方式、であった。

しかし 1960（昭和 35）年ごろから母貝の価格が低迷すると、母貝生産者の中から真珠養殖への転換を求める声が大きくなる。その結果、1962（昭和 37）年から母貝養殖業者の真珠養殖への転換が認められることになった。竹ケ島での真珠養殖は 1962 年以降のことなの

で、真珠養殖と母貝養殖が混在する時代に入っていた。津島町誌によると、1965（昭和 40）年に竹ケ島で１経営体が真珠養殖を始めているが、おそらく上述した共同事業体がこれに該当する。その後共同事業体は解散して個人経営になったと思われるが 1985（昭和 60）年の時点では８経営体が真珠養殖を営んでいた。ちなみに 1998（平成７）年漁業センサス時の真珠養殖は 12 経営体、母貝養殖は５経営体のあわせて 17 経営体であった。

母貝養殖の種苗は島の周りで杉の葉を海中に吊るして自家採苗したこともあったようだが、メインは高知県から購入していたという。６月ごろにアコヤガイの稚貝を高知県まで買いに行き、トラックと船で島に運び、45 ㎝角のパールネットに入れて２年ほどかけて母貝に育てた。貝の表面にフジツボや海藻がついて成長をさまたげるので、年に７、８回、貝を圧力海水で掃除した。竹ヶ島のアコヤガイは、自然環境の良さから病害虫が少なく、高値で取り引きされ、主に三重県へ出荷されていたという。

通勤漁師（現在の真珠養殖）

1960 年代後半からの真珠不況を乗り越えた愛媛県の真珠養殖だが、1996（平成８）年から顕在化した赤変病により大打撃を受ける。母貝の大量斃死が相次ぎ、母貝養殖、真珠養殖ともに経営体の撤退が相次いだ。

竹ケ島も例外ではなく、17 経営体から大幅に減少し、現在は４経営体が営むだけになっている。４経営体とも真珠養殖で、母貝養殖は行われていない。赤変病の蔓延以来、アコヤガイの種苗は人工種苗になっており、中国産アコヤガイとのかけ合わせによるハーフ貝がつくられるようになった。ハーフ貝は真珠の濁った「色目」や「照り」に問題があり、真珠の品質低下を助長している。

一方、2019（平成 27）年７月からは赤変病が原因でない新たなアコヤガイの大量斃死が発生しており、宇和海では全稚貝の 2/3 が死んだといわれている（三重県と愛媛県が中心で、長崎県では今のところ大量斃死は発生していない）。

竹ケ島の真珠養殖漁場は高島と結ぶ砂州の南側の海域に区画漁業権が設定されている。真珠の作業施設の眼と鼻の先にあたる。この海域は島が冬季の季節風（北西風）を遮ることになるので静穏度が確保しやすい環境にある。

竹ケ島の漁業者は下灘漁協に所属している。愛媛県の漁協は 2020 年４月に県１漁協になった。八幡浜漁協など８単協は参加を見送っているが、下灘漁協は合併に参加しているので現在は同漁協の支所にあたる。竹ケ島の組合員は、現在、正：６人、准：４人の合計 10 人である。ただし、このうち島に定住せず、本土から通って漁業・養殖業に従事している人が半数以上の６人に及ぶそうだ。水協法上は、島に住所を有することが組合員資格の条件になるはずだが、実家が島にあれば不問にするというのが実態のようだ。学校はないから子どものいる世帯は基本的に島に住めない。医療施設も、商店もないから不便このうえない。したがって、現役の漁業者は本土側に生活の拠点を移し、島に通って真珠養殖を営んでいるわけだ。つまり「通勤漁師」といえる。東日本大震災で被災した地域、とりわけ島嶼部では通勤漁師が増えているが、水協法上の拡大解釈をどこまで維持できるのか、これから大きな問題になる可能性もある。

竹ケ島で真珠養殖を営む４経営体の中に、若い漁業者がいるらしい。後述する梅田さんが

話していた。本土側の岩松に住んでいて島に通勤して真珠を養殖している。元来頭のいい子で宇和島東高校を卒業し、本来は大学に進学すべきところを真珠養殖が好きで今の仕事に従事しているとのことだ。母親は教員をしているという。

日本一に躍進した愛媛県の真珠養殖は、原因不明の稚貝の大量斃死に見舞われ、母貝を十分に供給できない事態に直面しており、母貝の確保は大きな障害になっている。もともと天然のアコヤガイを利用していたが、人工的に種苗を作るようになり、遺伝資源の多様化が失われたところにもってきて、中国産のアコヤガイとのハイブリッドが作出されるに及び、今や天然のアコヤガイは日本から消えてしまいかねない事態となっている。過去に真珠養殖が行われず、人工種苗に汚染されていない海域に在来のアコヤガイが残存しているのが唯一の救いである。この天然のアコヤガイを母貝として真珠生産に取り組んでいるのが、福岡県の相島（あいのしま）であり、長崎県の奈留島である。

真珠養殖の作業用施設（左）、真珠養殖の漁場（右）

梅田さん

港から内陸部に進むと公民館があり、ここを左折した先に小学校跡があった。これまでに会ったのはネコだけだったが、ようやく家から出てきた老人に会った。梅田さんといい 84 歳になる。梅田さんに島の様子や歴史を聞く。84 歳とは思えないほど頭脳明晰で、古い話をよく覚えておりしかも数値は正確だ。以前島の自治会長を務めていたという。

梅田さんは真珠や真珠母貝の養殖を行っていたが、現在は半農半漁を営み、84 歳にして現役である。もちろん農業は生活に必要な野菜を自給している程度だが、漁業は島の周辺で刺網によりイセエビを獲っており、一部は出荷している。

島にイノシシが生息しており、農業はイノシシとの戦争だった。最近、箱罠を購入して、イノシシを捕まえたそうだが、それ以来、畑にイノシシは現れなくなったらしい。農業は、自分で食べるものを何でも作っているが、子どもや孫のために玉葱、ジャガイモ、西瓜などもつくる。ジャガイモは「遊子（ゆす）」のものよりいいものが採れるらしい。子どもたちは皆島外でくらしており、孫の長女は幼稚園の先生、男の孫は呉の海上自衛隊に勤務しているという。

ここで島の生活インフラの現状をまとめておこう。

水は 1985（昭和 60）年に本土からの海底送水管が敷設され、水道が整備された。当時の島の人口は 111 人だった。梅田さんはこの時、自治会長を務めており、通水式で挨拶したのでよく覚えているという。一方、下水道は 1996（平成８）年に漁業集落環境整備事業で処

理施設が整備され、全戸が水洗化している。

電気は 1970（昭和 45）年に本土からの海底ケーブルが完成し、自由に使えるようになっている。それ以前は自家発電が行われており、発電は 18 時～22 時までの４時間に限られていた。もちろんそれ以前はランプ生活である。ケーブルが敷設される以前からテレビはあったそうだが、冷蔵庫はプロパンガスを冷媒とするガス式だったという。

小学校跡で会った梅田さん（左）、イノシシの被害を防ぐためにネットが張られた畑（右）

小学校跡

梅田さんによると、小学校の用地はもともと海だった。戦後埋め立て造成して平地を確保し、当初はここに中学校を建てた。埋め立ては重機がなかったために島民も加わって手作業で行われたそうだ。梅田さんは新制中学校に通ったが、当時中学校には 20 人ほどが在籍していたという。団塊の世代が小学校に上がるころがピークで、島の小学生は 200 人ほどに及んだ。その後別の場所にあった小学校がこちらに移転し、中学校はなくなった。スクールボートがなかったので、中学生になると島を出て、本土にある津島中学校の寄宿舎に入った。

現在の校舎は 1997（平成９）年に新築されたものである。その後、島から子どもがいなくなったため 2016（平成 14）年３月から休校になっている。

校舎の隣に公民館が置かれている。その前には、衆議院議員選挙のポスター掲示板が置かれ、２人の立候補者のポスターが貼られていた。有権者 10 人ほどの島でも掲示板をつくり、候補者がポスターを貼りに来るのだから大変である。

休校中の小学校の校舎（左）、旧小学校の校庭（右）

集落を抜けて海にでたところに「防波堤記念碑」が立っていた。1950（昭和 25）年に防波堤の整備を求める声が大きくなり、1952（昭和 27）年に４か月の工期で完成したと書いてあった。真珠養殖が始まる前のことだが、整備前は砂浜に船を引き揚げていたのだろう。その後漁港は拡張され、現在のような立派な姿になったのだが、一方で過疎化が進行し、せっかく整備した漁港も十分活用されなくなっているのが現状だ。

下灘漁協

16 時前に竹ケ島を後にする。島の滞在時間は 40 分ほどだった。

来た時よりも北西風は強くなり、今度は左舷側から滝のように海水が吹き飛ばされてくる。仕方なしに船室に入り静かにしていた。船長は操舵室にいるので、島の行き帰りに会話を交わすことはなかった。16 時 15 分ごろ本土側に戻った。

来る途中、道路沿いに漁協の事務所を見かけたので、竹ケ島の漁業者が所属する漁協ではないかと思って訪ねる。ところがそこは内灘漁協といい魚類養殖をメインとしている漁協で、竹ケ島は下灘漁協に所属しているという。場所はもっと南に下がった嵐という地区にあると教えられた。17 時を回ると漁協は閉まってしまうので、あわてて内灘漁協に向かった。内灘湾沿いを走り、国道 46 号を南に下がるので宇和島とは逆方向となる。カーナビで確認すると 10 kmほど離れているので急いだ。国道 46 号の坂を下り、嵐湾の湾奥に下灘漁協はあった。17 時少し前に着き、ぎりぎり間に合った。

下灘漁協は愛媛県の真珠養殖の中心的漁協である。かつての栄華を反映して、３階建ての立派な建物であった。支所長とおぼしき人に竹ケ島の組合員と真珠養殖の現状を簡単に聞き取る。

計画の時間を過ぎていたのですぐに宇和島駅に向かう。帰りは宇和島道路という高速道路を通ったが、まだ開通したばかりと見えて高速料金は取られなかった。宇和島の中心地に戻り、17 時 05 分にレンタカーを返却。予定の列車に乗り遅れたため次の特急に乗ることにした。時間があったので、市立図書館に行き、宇和島市誌を閲覧する。

18 時 08 分に宇和島駅を出発し、19 時 28 分に松山駅に着いた。市電に乗り、当日の宿泊先である東横インに直行した。

愛媛県漁協下灘支所の建物

【文献】

津島町誌編纂委員会（2005）：２.宇和島藩・吉田藩のイワシ網漁業，津島町誌改訂版．津島町，846-880.

津島町誌編纂委員会（2005）：第３節水産養殖業の発展，1.真珠養殖の変遷，津島町誌改訂版．津島町，881-900.

愛媛県（1997）：小島のくらし（2），宇和海の小島に生きる．昭和を生き抜いた人々が語る愛媛の景観．愛媛県生涯学習センター.